「主の民よ喜べ、主は近い」

イザヤ書４０章１－１１節、
ルカによる福音書２章１－２０節
森島　牧人　牧師

アドベント第二週に入った今日は、クリスマスが誰のためにあるのかを、改めて考えてみたいと思います。

その問いへの答えとしては、それは人間すなわち人類のため、世界のため等というものが、すぐに思い浮かびます。しかし、クリスマスとは、第一に、「私自身のためである」ということです。「私という、一人の人間のために、クリスマスはあるのだ」ということが分からなければ、クリスマスの意味、またその意義を正しく理解することは出来ないからです。

しかも、この理解の上に立つことが出来た時、次なるこの究極的な問いかけが、私たちにとって必要になってくるのです。つまり、クリスマスとは人間が、否、この私が救われるための出来事であったのですが、それでは「その人間の救い、すなわち人間が救われるという出来事は、一体誰のためだったのか」という問いです。

今日の聖書は、私たちが繰り返し耳にして来た主イエスの誕生の場面で、「その地方で羊飼いたちが野宿をしながら、夜通し羊の群れの番をしていた。羊飼いのところへ天使が近づき、主の栄光が周りを照らしたので、彼らは非常に恐れた。天使は言った。『恐れるな。わたしは、民全体に与えられる大きな喜びを告げる。今日ダビデの町で、あなたがたのために救い主がお生まれになった。この方こそメシアである。・・・これがあなたがたへのしるしである。』すると、突然、この天使に天の大軍が加わり、神を賛美して言った。『いと高きところには栄光、神にあれ、地には平和、御心に適う人にあれ。』」（ルカ２：８－１４）と記されています。これを読んで分かるのは、この箇所は、初めから終わりまで、ベツレヘム郊外にいた羊飼いの群れに「神の栄光が現れた」ということを、伝えるものであるということです。神話だと思う人もいるかもしれませんが、この箇所の描写は、主イエス誕生のすべてが天から来たものであり、神が、主イエスの降誕を、私たち人間より前に、喜び、祝福されていることを、私たちに示すものです。そして、そのことを通して「クリスマスの中心が私たちではなく、神の思いにある」ということを、私たちは知らされるのです。「神こそがクリスマスを必要とされた」などと、私たちは考えたことがあったでしょうか。

クリスマスが、神のために必要だったとはどういうことでしょう。創世記にアダムとエバが罪を犯す場面が出て来ます。神の命を破り、善悪の知識の木から木の実を取って食べてしまった二人、罪を犯すことによってもたらされるのは死のはずでした。本来ならば二人はあの場で殺されなければならなかったのです。しかし、神は二人を生きるようにと、皮の衣を作って着せ、エデンの園から追放されたのでした。その後も罪を犯し続ける人間・・・怒りの雷を下しながらも、なお人間に「生きよ」と言い続けてくださった神。その神が必要とされたクリスマス・・・。ここへ来て私たちは、聖書に記されたクリスマスの出来事の場面すべてが「神の愛」を描写するものであること、そして、それは「神の言」の実現であり、「神の御業」そのものであったことに、初めて気づかされるのです。とすれば、クリスマスを祝うことは、神への感謝と共に、神の力をほめ讃えるものでなければなりません。

聖書を読み、祈り、神の栄光を讃えながら、アドベントを過ごして行きたいと思います。